

低下する自国への自信

～「日本人の意識」調査にみる30年（1）～

世論調査主任研究員 加藤元宣



日本人の意識変化を長期的に追跡するため、5年ごとに同じ構成で実施してきた「日本人の意識」調査は、今回の2003年調査で7回目となりました。その調査結果から、この30年間の大きな変化の1つとして、日本人が国に対して自信を持ってなくなってきたことがわかりました。

《今回の調査の概要》

調査日：2003年6月28日（土）
～29日（日）
調査方法：個人面接法
調査対象：全国16歳以上の国民
調査相手：住民基本台帳から層化2段無作為抽出 5,400人（12×450地点）
調査有効数（率）：3,319人（61.5%）



国に対する自信の変化

図1は、「日本人は、他の国民に比べて、きわめてすぐれた素質をもっている」「日本は一流国だ」「もう日本は、外国から見習うべきことは少ない」という3つの質問に対して「そう思う」と回答した人の割合を調査年ごとにみたものです。このような日本人の国に対する自信は、83年調査をピークに減少を続けており、今回の調査でも前回98年の調査と同様に、これまでの最低の水準となっています。

自信の変化は、この30年間に日本がたどった時代の軌跡とほぼ重なっています。敗戦による壊滅的な状況から短期間に復興を成し遂げた日本は、かつて『経済大国』と呼ばれるまでになりました。日本は、オイルショックによる70年代の世界的な景気の低迷も、生産技術の革新や労使協調による経営努力などで乗り越えました。そして79年には、欧米人の視点で日本の社会システムの優位性

図1 日本に対する自信の推移（「そう思う」と回答した人の割合）

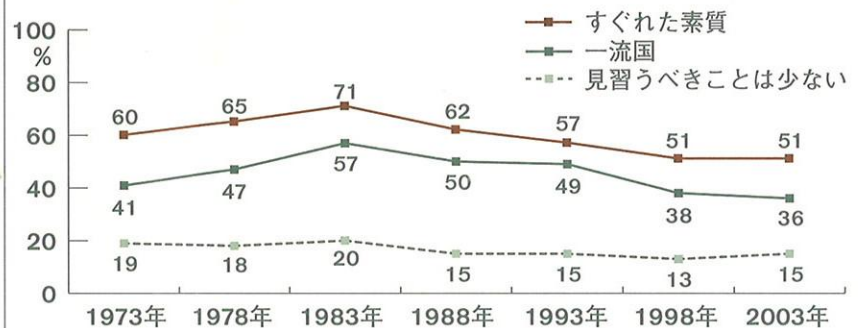
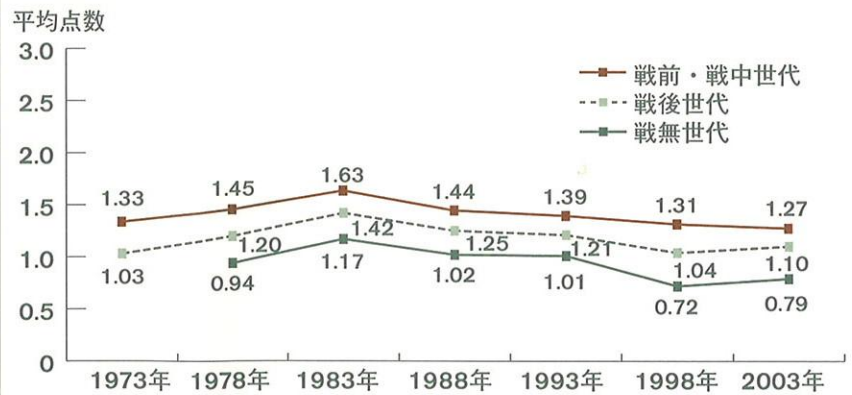


図2 国への自信・世代別の平均点数の推移



を論証した『ジャパン・アズ・ナンバーワン』が邦訳され、ベストセラーになりました。また、その翌年の80年には、自動車生産台数がアメリカを抜き世界第1位となりました。こうした時代背景が、「日本は一流国であり、日本人はきわめてすぐれた素質をもっている。最早、外国から見習うべきことはない」という国への自信を高めることにつながった

ものと考えられます。

けれども、こうした感情のバックボーンとなっていた経済の失速は、日本人の意識に深い影を落とすこととなります。88年調査で一転して減少傾向に転じた国への自信は、バブル崩壊後の93年調査、金融破綻が相次ぎ平成不況が深刻化した98年調査、そして今回の調査と続いて、低下を続けています。



国への自信の世代効果と時代効果

次に、同じ時代に生まれ、共通の経験・関心・意識傾向を持つ世代を軸として、国への自信がこの30年間でどのように変化してきたかをみてみることにします。

図2は、各回答者ごとに、前述の3つの質問に対して、3つとも該当すれば3点、2つならば2点、1つならば1点、まったく該当しなければ0点として点数化したものを、回答者の生まれ年によって、戦前・戦中世代（1938年以前生まれ）、戦後世代（1939年から1958年生まれ）、戦無世代（1959年以降生まれ）の3つに分類して、それぞれの世代の平均点数を求め、その推移をみたものです。この図からは、どの調査の時点でみても、戦前・戦中世代の平均点数が最も高く、戦後世代、戦無世代と年齢が下がるに従って平均点数が低くなっており、世代によって国への自信に違いがあることがわかります。また、調査年によって、どの世代もほぼ同じように平均点数が推移しており、国への自信は世代の違いに関係なく時代状況によって大きく影響を受けていることもわかります。このように、国への自信を規定している要因には、世代によるものと時代によるものとが并存していることが指摘できます。



時代の変化の影響を受けない国への愛着心

国への自信は、他国などを比較の対象とした上で、それよりも日本がすぐれていると考えることによって成立している側面があります。

その一方、自分の生まれた国に対する無条件の愛情に立脚したナショナリズムの存在にも注目して見る必要があります。そして、このような

図3 日本に対する愛着心の推移（「そう思う」と回答した人の割合）

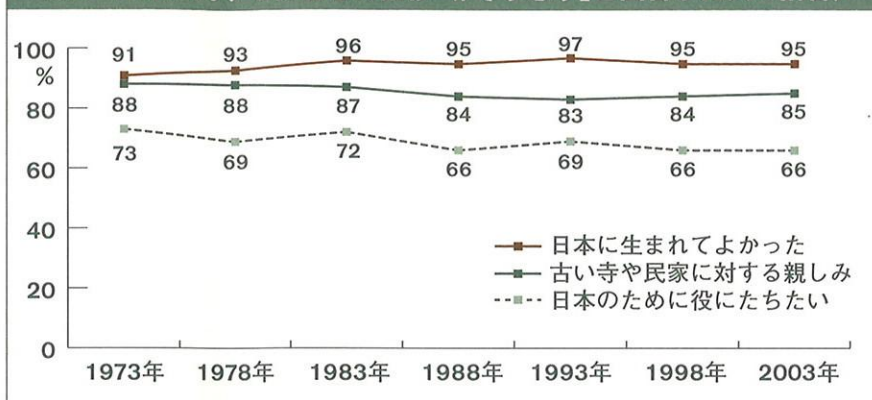
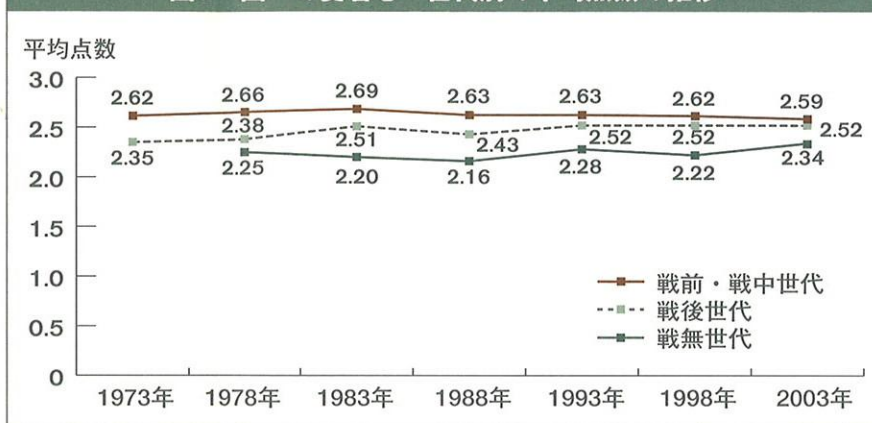


図4 国への愛着心・世代別の平均点数の推移



感情は、「国への愛着心」とみることが出来ます。

「日本人の意識」調査では、こうした国への愛着心を、「日本に生まれてよかった」「日本の古い寺や民家を見ると、非常に親しみを感じる」「自分なりに日本のために役にたちたい」という3つの質問でたずねてきました。図3は、それぞれの質問に対して「そう思う」と回答した人の割合を調査年ごとにみたものです。ここからは、国への愛着心が時代状況の変化にかかわらず、常に高い水準で推移してきたことをうかがうことができます。

また、図4は、愛着心についての上記の3つの質問について該当する場合を合計して点数化し、3つの世代別に平均点数を求めたものです。世代により愛着心の強さに多少の違

いが認められるものの、それぞれの世代の平均点数には顕著な経年変化が表れていないことが読み取れます。このことは、国への愛着心が時代の変化の影響をそれほど受けていないことを示しています。



変化する自信と変化しない愛着心

調査の結果からは、国への自信には時代状況が敏感に反映されるのに対して、国への愛着心にはそうした傾向があまりみられないことがわかります。また、国民の多くが世代の違いにかかわらず、日本に対して変らない深い愛情を抱き続けてきたことも指摘することができます。

詳しくは『放送研究と調査』2月号をご覧ください。■